

救護第26班 5月12日～5月19日 医師・高尾 亮



牡鹿半島のエリアにある避難所を巡回し、状況を確認。だんだん避難所の人数が減ってきて、個人のスペースも確保できてきていました。バスが復旧していましたが、老人だけというお宅もあって医者に通えない人もいたようです。避難所に近い個人のお宅も訪問しました。高台にあり津波を免れた住宅で、そこにも避難されていたようでした。ただ満潮時には行けなくなる避難所もありました。



巡回では、被災された方の話を聞くことが多く、血圧を測るなど、健康状態も確認してきました。ライフラインは、電気は通っていましたが、水道は、冠水箇所もあって遅れるのではないかと思います。地震は1日に1～2回あり、巡回で移動しているときなど、いつも高いところへの避難ルートを考えていました。

女川病院とその周囲も視察しました。周りは津波で流され何も無い状態で、高いところにある病院も1階部分は被害を受けていました。担当エリアではなかったので、外からだけの視察でしたが、ニュースによく出ていた、画面の中と同じような光景でも、実際の現場に立つと、被害の大きさに圧倒される思いでした。

家が流れたり家族を失った被災者の方のお話を聞いて、震災の被害を実感しました。熊本へ帰ってから

も数日は、被災地の光景が浮かんできました。